
人に恋した女の子？

非国民

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人に恋した女の子？

【Nコード】

N2018B

【作者名】

非国民

【あらすじ】

16歳の誕生日、それは私達にとって大切な日。その大切な日に人助けの為に人里に降りることになったエメラルド（愛称エミイ）の愛（？）と波乱の不思議な物語

ブローグゝ旅立ちの日々（前書き）

ふう……、前に修正しようと思ったのですが、間違えて消しちゃったのでまた書きなおしました。大変でした（苦笑）それと、一応位置付けは恋愛ですが、恋愛（？）ってのが正しいかな

ブローグ旅立ちの日

今でない時、ここでない場所。これは、そんな世界の物語。

ここは、人々が寄り付かない、秘境……。

周囲を鬱蒼と生い茂った背の低い木々が囲み、その中央に位置する形で、天を突くような大きな樹が一本あった。

そんな、大樹の根元から声が聞こえてきた。

「エミイ、起きなよ。もう朝だよ。」

誰かが私を呼んでいる。

「んみゅ……。お兄ちゃん、後5分だけ寝させて……。」

エミイと呼ばれた少女はゴロンと寝返りをうつ。

「ダメだよ。エミイは今日が大事な日だってこと、ちゃんと覚えているんだろ？」

お兄ちゃんと呼ばれた男の子が、エミイを起こそうと彼女の頬を角で突きながら言った。

「ん……、きょお……？」

エミイはベッドの上で眠たそうにまぶたを擦りながら、今日の予定について考えた。

「あつ……！」

突然、エミイが勢い良く跳ね起きる。その動きに合わせ、ベッドに敷き詰められていた乾草が数本、床にパラパラと落ちた。

「なんで、もつと早く起こしてくれなかったのよ。」

エミイは口を尖らせ、男の子に文句をつけた。

「何言ってるんだよ。僕はきちんと起こしただろ？」

ったく……。

そんなことはいいから、早く母様のところに行きなよ。」

男の子が急かす。

「う、うん。」

エミイは母の待つ大樹の奥へと急いだ。

エミイの部屋と母の待つ広間は結構離れている。

エミイは寝室から飛び出し、廊下を走った。

螺旋状に作られた階段を一段飛ばしで飛び降りていく。

途中、擦れ違ったメイドさん達が困ったような顔をしていたが、まあ大丈夫だろう。

しばらく走ると、やっと母の待つ広間へと辿り着いた。

「あら、エメラルド遅かったわね。」

てっきり、忘れてたのだと思ってましたよ。」

一瞬、ビクツと身を縮込ませて母を見上げる。

母は、サラブレッドを二回り以上大きくした体格に、黄金色の一本の大きな角。

アルビノを思わせる白い肌に、金色の綺麗な縦髪。

そう、私達はユニコーンなのだ。

「まあいいでしょう。今日はエメラルドが初めて人里に降りる日ですからね。」

何かと準備もいるでしょう。」

そうなのである。私達ユニコーンは、16歳の誕生日になると人里に降り、人々の役にたつよう陰ながら手助けするという大切な仕事があるのだ。

私の場合、それが今日なのである。

「エミイ、もう準備はできてますか？」

「はい。」

そう言っていると私は目を閉じ、額の角に意識を集中させる。

ポウ……ッ

エミイの額の角が淡い金色の光を発する。それと同時に、エミイを淡い光が包み込む。

数瞬後、エミイはピンクのワンピースを着た、金色の髪の子へと姿を変えていた。

「その姿も可愛いわぁ」

母が私を褒める。

「そう……かな……？」

私はその場でくるっと舞ってみる。

その動きに合わせ、ワンピースの裾がフワッと舞う。

「本当に可愛いわぁ」

私をギュッと抱き締める。

ここまでくると、もう親馬鹿としかいいようがない。

「気を付けてゆくのよ……。寂しくなったら、帰ってきてもいいのよ？」

母が私に抱きついたまま耳元で囁く。少し、啜り泣くような声も聞こえるが、ここからでは母の顔は見えない。

「安心してください。きつと……、きつと無事に帰ってきます。」

私も母のからだを抱く。

涙が、頬をつたう。

私は暫らくの間、母と抱き合っていた。

「エミイ、忘れ物はない？」

お兄様が聞いてくる。

「ハンカチとちり紙はちゃんと持った？」

今度はお母様だ。

「大丈夫だって。忘れ物はないよ。皆心配性ね。」

玄関のノブに手をあてる。

「寂しくなったら、帰ってきてもいいんだぞ？」

「そうよ？エミイ、無理しないでね？」

お母様とお兄様が、私を見送ってくれる。

「それではお母様、お兄様行ってきます！」

私は勢い良く玄関を飛び出した。

第1話　迷いの森

空を見上げると、エミイの門出を祝福してくれているのか、太陽がサンサンと輝いている。

「んっ。まぶしい」

太陽の光を見、目を細める。

そよ風が、エミイの髪をやさしくなで、長い髪がふわっと舞った。

「それに、風も気持ちいい」

遠出するのは初めてだった。

不安と希望。そして、今日からの新たな環境に期待を抱きながら、木々の間を歩いていく。

「エメラルド」。気を付けていくのよ」。

後ろを振り返ると、母がまだ手を振っている。

泣かない……。

そう、決めていたはずなのに……。

暖かい水がエミイの頬を伝う。

「お母様もお身体に気を付けて。」

両手を振りながら、エミイは叫ぶ。

そして、さっときびすを返すと一歩、また一歩と森の方へと歩みを進める。

それっきり、エミイが振り返ることはなかった。

—— 迷いの森 ——

ここは、大樹の周りを囲む森。

各々の木々が各自の意志を持ち、移動することで立ち入った者を惑わす不思議な森である。

人々がこの森へと近付かないのは、この木々の影響ともいえる。しかし、よく見るとこの木々が動いていない箇所がある。

ユニコーン達が人里に行く時はこの、動いていない木々の間を通るのである。

「んゝこつちね。」

動いていない木々の間を進んでいく。

どのくらい歩いただろうか。ふと、違和感を感じたのである。

その違和感は徐々に確実な物になり、やがて、確信へと変わった。

「んみゆうゝ……。もしかして……。迷った？」

動いていない木々の間を通っていたはずなのに、気が付くと周囲の木々が動きまわっていた。

辺りを見回す。目印となる止まっている木が見えない

「どうしよう……。」

エミイが自らの体を抱き、目の幅涙を浮かべてどうやってここを抜けようかと考えていると、森の奥から声が聞こえてきた。

「んみゆ？」

涙を拭き、声のした方に行ってみる。そこには、一匹の黒猫が歌いながら歩いていた。

「わ・た・し、くゝろにゃんゝてゝあしはしいろよゝ」

ピンと尻尾を立て、トコトコと歩いている。

「ね、ねえ……」

エミイは恐る恐る声をかけてみる。

「にゝやー!!」

黒猫は毛を逆立て、

「シャーッ」

と威嚇してきた。

「あ、あの……。この森から出る方法、知らない？」

黒猫に尋ねてみる。

「私が知るわけないでしょ。私だって知りたいんだから。まあ、人間に私の言葉はわからないでしょうけど。」

そう言うのと黒猫はフンとそっぽを向き、森の奥へと走っていく。

「あつ、待って……。」

エミイは黒猫が走る方へと走った。

時には木の根につまずきそうになりながらも、黒猫を追い掛ける。しかし、その努力も虚しく徐々にその姿が小さくなっていく。

「ハアハア。見失っちゃった……。」

カップ麺が出来るか？と思われる時間走っただけなのに、エミイは息を切らせ、近くの倒木に腰を下ろす。

数度深呼吸を繰り返し、息を整え、また黒猫が去った方角に足を進めた。

先程の黒猫がどこかに隠れていないだろうか、周辺に目を配りながら歩く。

が、もちろん見つかるわけもなく、気持ちもどんどん下火になってくる。

「あれ？」

エミイはある一つのことに気が付いた。

それは、先程の黒猫以外の動物が目に入らないのだ。

いくら迷いの森だと言っても、鳥の鳴き声が聞こえないときはなかった。エミイは嫌な予感を覚え、辺りを見回す。少し寒気もしてきた。

寒気を紛らわすように両手で自分を抱く。

と、それと同時にガサガサッと木の葉が揺れる。

ビクッ

慌てて音のした方を見る。

そこでは、迷いの森の木々達が慌ただしく動いている。

「よかったあ……。おばけかと思ったあ……。」

状況は全然いいことにはなっていないのだが、エミイは膨らみ始めの胸に手をやりホッと息を吐く。

「でも、これからどうしよう。」

安心したのも束の間、エミイは状況が好転していないことに気が付き、また考え始めた。

「……。ああつ、ダメダメ。考えてても仕方ない、歩こ。」

いくら考えても、いい案が浮かんでこない。

一度大きくかぶりを振る。

頭をよぎる不安と戦いながらも、エミイは人里への距離を少しでも縮める為、再び歩き始めようとした。

と、次の瞬間。

激しい揺れがエミィを襲う。

始めは小さな揺れだったが、それは次第に大きくなり、やがて立つこともままならない程にまでなっていた。

「あひさ」

近くの木にしがみ付くと、エミイは目をぎゅっと瞑り揺れが治まるのを待った。

「うにゃー!!」

突如、頭上から声がしたかと思うと、エミィを激しい衝撃が襲う。

ゴ
ン
"
(
D
)

たまたまエミイがしがみ付いていた木にあの、黒猫が登っていたのだ。

そして、激しい揺れでバランスを崩したのか、エミイの上に落ちてきたのだ。

「うにゅす……。」

「うにゃ〜……。」

目の前で星が舞い、二人はその場で仲良く昏倒した。

それから、どのくらい気絶していたのだろうか。ふと目を覚ますとサンサンと輝いていた太陽もその姿を隠し、辺りは闇に包まれている。

空では、太陽に変わって丸いお月様と、満天の星空が輝いていた。

（一体、何が起きたの？）

エミイはズキズキと悲鳴をあげる頭を押さえ、軽く頭を振る。

自分の倒れていた辺りを見ると、先程の黒猫が頭に大きなたんこぶを付けて、目を回していた。

エミイは黒猫を膝に抱き、目を閉じる。

そして、額に精神を集中させる。

すると、今まで何もなかったエミイのおでこに、15cm程の金色に輝く、可愛い角が現れた。

と、それと同時に金色の光が黒猫を包む。

きっかり3秒後、黒猫のたんこぶはきれいになくなっていった。

そのまま、黒猫が目を覚ますまで膝の上に抱き、頭を撫でてやる。

「にゃ、にゃ〜……。ここは……。どこにゃ？」

黒猫がうつすらと目を開ける。と、いきなり暴れだした。

「は、離しやがれにゃ。人間！！」

エミイは手を引っ掻かれ、

「きゃっ」

と悲鳴をあげて黒猫を離した。

「おい、人間！私は頭を打った怪我猫にゃ！！そんな私の頭を撫でるにゃんて。」

黒猫は頭を擦りながら怒ったような口調で言った。

「あ、あれ？全然痛くにゃいにゃ？」

「えつと……。私が治したの……。」

エミイは伏せ目がちに言う。

「おにやえがあゝ!？」

と、今まで気が付かなかったのか、黒猫はエミイの額にある一本の角に気が付いた。

「にや、にやにやにや？」

もしかして……。人間じゃにやい？」

「は、はい。私、聖角獣なんです。」

エミイは何故自分が人里に行くのか、どうしてこうなったのかを事細かに黒猫に説明した。

「もしかしくなくても、お前は馬鹿にや？」

話を聞き終えた黒猫が、すかさずエミイに聞いた。

「何故、人間にやんかの手助けをするにや？」

奴らは自然を破壊し、無駄に生き物達を殺す。

食べる為にやら文句は言わにやいが、食えずに捨てたりもする。

それにやのに、どうして助けようと思うにや？」

黒猫はエミイをじつと見つめ、返事を待つ。

「。。」

エミイは目を閉じ、何故、自分が人を助けたいのかを考える。

やがて、一つの結論に辿り着いたのか、口を開いた。

「それは……。多分全ての人間が悪い訳ではないからだと思う。

少ないかもしれないけど、私のお母様は狼に襲われているところを人間に助けられたの。

その人は、銃を持っていたらしいのだけど、威嚇するだけで狼を殺さずに逃がしたんだって。

自分が襲われてしまうかもしれないのにだよ？

普通だったら、狼を撃つと思わない？

でも、その人間はそれをしなかった。

後でお母様が聞いたなら、無益な殺生はしないって言っただけなの。

すごいでしょ？私は、そんな心の綺麗な人間に会いたいからだと思う。」

そういうと、エミイは黒猫に微笑んだ。

「ふうん。そっかあ……。そんな人間ばかりじゃにやいと思うけど、それでも行くのかにや？」

「うん。」

黒猫は腕を組み、しきりに頷く。

「そっかあ……。にやら、それにはここから出にやいとにや。」

ユニコーンの力でどうにかにやらにやいかにや？」

「うん、でも……。私達の力は自分の為には使えないの。」

例外は人間に変身することだけ……。」

そう、私達の力は他の生き物を幸せにするための力。

自分の為には使えないようになってるのだ。

「にやら、私の為に力を使ってくれにやいかにや？」

私もこの森から早く出たいから。」

「あっそっかあ。その手があったんだ。」

ぽんつと手を打つと、エミイは近くの木に手を触れ、額に精神を集中させる。

「お願い。力を貸して……」

そう言った瞬間、エミイの角が金色の光を放ち始めた。

と、動く木がサササつと道を開ける。なんと、人里までの一本道が出来上がった。

「す、すごいにや。」

黒猫のただでさえ、丸い目が更に丸くなる。

二人は、木が退けて出来た道を歩き始めた。

山根村（前書き）

永らくお待ちせしました。スランプや色々なトラブルに見舞われ、中々更新できませんでした。お待ちになった方、申し訳ありませんでした。 m () m

山根村

迷いの森を抜けた後、少し歩くと左右二手に別れた道に出た。

そこには、矢印が付けられている看板が建てられてあり、右側には小さな村、左側には湖があるらしく大体の距離と名前が書かれている。

「それじゃあ、わたしはこっちに用事があるから、エミイも気を付けて行けにゃ」

黒猫はしつぽをふりふりとしながら湖の方へと歩いて行く。

「黒猫さんも気を付けてえ」

エミイは手をぶんぶんと振りながら黒猫を見送る。

やがて、その姿は次第に小さくなっていった。

「さあ、私も行かなきゃ」

黒猫が完全に見えなくなった後、エミイはさつときびすを返すと村の方へと歩み始めた。

く山根村く

しばらく進むと、村の入り口らしき門が見えてきた。

入り口には大きなアーチが設けられており、そこには『ようこそ山根村へ』と、書かれている。

「よし、頑張るぞ!!」

気合いを入れる為、頬をペチペチと両手で叩く。

その後、どこか不自然はないか確かめる様に額や身体をペタペタと触ってみる。

（よし、問題ない）

エミイはこれからの期待に胸を膨らませ、山根村へと入っていった。

辺りを見回してみる。

村の入り口付近には、民家や商店があるわけでもなく、辺り一面たんぼと畑が広がっている。

土手には蓮華の花が咲いており、来村者を暖かく出迎えているようだ。

よく言えば静かでいいところ。悪く言えば刺激の少ない、そんな感じの印象を受けた。

入り口から少し歩くと、たんぼを耕しているのだろうか、おじいさんが牛に長いくわのような物を取り付け誘導している。

「わあ、すごい。」

くわは相当重いのだろう。

ただでさえ歩くのが遅い牛が、より遅く歩いている。

「よし、最初の仕事だ！」

辺りを見回し、人がいないことを確認する。

誰もいないことを確認した後、私は額の角に意識を集中した。

ポウッ

淡い光がエミイの角を包み込む。

（時よ牛さんの周りの時間を進めて！）

エミイがそう念じた瞬間

「う、うわあああっ！！」

ゆっくりと歩いていた牛のスピードが急にあがった為に、（当社比、三倍くらいに）手綱を引っ張っていたおじいさんが引き摺られていく。しかし、普通通りに歩いている牛には何故おじいさんが引き摺られているのか分かるはずがなく、そのまま歩みを続けていく。

あまり進まないうちに、おじいさんはその場で気絶してしまった。

「あわわ、大丈夫ですか？」

エミイは引き摺られて気絶したおじいさんのところへと急いで駆けよると、すぐにたんぼから引きあげ、おじいさんの首に下がって

たタオルを借りる。

それをたんばの横に流れる小川で浸し、きつく絞った後、急いでそれをおじいさんの額へと乗せた。

「これでよし。次は……」

チラツと隣で寝ている牛に目をやる。

あの後、エミイをタツプリと叱った牛は満足したのか、安らかな寝息をたてている。

エミイはびくびくしながらも牛の後ろに隠れ、額の角へと意識を集中させる。

（大地よ、おじいさんの怪我を治して）

エミイの角が発する淡い光と同じ光が、おじいさんを優しく包み込んでいく。

その光はやがて小さくなり、おじいさんの怪我と一緒に消えていった。

「う、うん……」

頭を振りながらおじいさんが目を覚ます。

「あ、目が覚めましたか？」

「ここは……。あれ？ ワシはなんでこんなところに？」

おじいさんは辺りを見回した後、何故自分がこんなところで寝ていたのか記憶を辿っていく。

やがて、一つの結論に辿り着いたのか、おじいさんが深々と頭を下げ、お礼を言ってくる。

「ああ、お嬢さんが助けてくれたのかい？ すまないねえ」

「そ、そんな私は当たり前前の事をしたままで……」

ブンブンと両の掌をふる。

「えらい！！ 今時の若者は人助けなんて進んで行おうとはせんのに……」

がしつとエミイの手を取る。

「きっと親御さんの教えがいいのじやろうなあ。」

おじいさんがうんうんと頷き、涙を流している。

エミイは諦めたのか、何も反論しようとしなかった。

「そうじゃお嬢ちゃん、きちんと礼もしたいし、ワシの家へこんか？」

「いえ、そんな……。急にお邪魔するのも悪いですし……。」

「まあ、そう遠慮せんと。ほれ、ついてきなさい。」

おじいさんが、エミイの手を引っ張っていく。

「ほれ、帰るぞ。」

ペチペチと牛を叩く。

モーツと一声鳴いた後、牛はおじいさんの後について歩き始めた。

たんぼから少し歩くと、土壁でできた一件の平屋についた。

その家の引き戸を引き、おじいさんが声を上げる。

「おおーい、帰ったぞ。」

おじいさんの声を聞き付けてか、

「はあーい」と、一人の少年が奥の部屋から出てきた。

「あ、おじいちゃん。お帰りなさい。」

奥から出てきた少年は黒い髪をした何も特徴のない、普通の人間だった。

ただ他との違いは、その目が堅く閉ざされていることだろう。

「えっと、初めまして。」

エミイが軽く会釈をする。

「あ、ああ、お客さんがいたんですか？ すみません、気付きました。」

少年が慌てた風に玄関の靴箱にお辞儀をしている。

私が怒っていると思ったのか、すぐにおじいさんがフォローを入れる。

「ああ、この子は小さい時から目が見えなくてね。許してやってくれないか。」

少年は小さく舌を出し、ごめんなさいとだけ告げる。

恐らく、自分が違う方を向いて挨拶したことに気付いたのだろう。

「はい、私は気にしていませんから大丈夫ですよ。」

「そうか、それはよかった。おっと、立ち話もなんじゃ、中でゆつくりしてくれ。」

エミィを居間に通した後、おじいさんはお茶を汲みに台所へと向かった。

「そうじゃ、もしよかったらウィルの友達になってやってくれんか？ 何分、目が見えんからか友達も中々作ろうとせんのじゃよ。」

おじいさんはウィルのことが本当に心配なのか、少し涙声になっている。

横目でウィルを見る。

ウィルは少し怯えたようなそんな表情を浮かべている。

「ええ、私でよければいいですよ。」

「本当！？ 僕、今まで友達を作ることが夢だったんだ。ほら、僕って目が見えないでしょ？ だから、いじめられるのが恐くて、中々友達も作れなかったんだ」

それまで不安顔で様子を伺っていたウィルが、本当に嬉しそうに笑う。

「あ、僕はウィルっていいいます。えっと、よろしくお願いしますね。」

「うん。えっと、私はエメラルド。エミィって呼んでね。」

「あ、あの……エミィさん……」

ウィルが躊躇うような、それでいて好奇心を押さえきれない、そんな表情を浮かべている。

「ん？ なぁに？」

「えっと、もしよかったら、村の外の話をしてもらえませんか？」

「村の外の？」

「はい。皆、あまりこの村から出ないから村の外がどんなのか知らないんです。」

期待に満ちたその表情を見、エミィは断ることが出来なかった。

山根村（後書き）

またまた、上手く書けませんでした。すみません

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2018b/>

人に恋した女の子？

2010年10月9日00時23分発行